

はじまりの美術館

(社会福祉法人安積愛育園はじまりの美術館)

所在地 福島県耶麻郡猪苗代町新町4873 設置者 民間非営利法人(社会福祉法人)

指定施設 / 美術博物館



福島県障がい者芸術作品展「きになるゑひょうげん」

2017年度から継続事業 | 鑑賞・発表・交流

2014年に社会福祉法人安積愛育園が開設したはじまりの美術館は、福島県からの委託で2017年から障がいのある方の表現を募集する公募展を継続実施している。応募や審査でのキーワードは「きになる」。作家本人や周囲の人が気になった作品を応募し、審査員や来場者も自身が気になった作品を選定して表彰。来場者も気になった作品を起点にさまざまな交流が生まれることを目指す公募展となっている。

きになるゑまちなか美術館

2020年度から継続事業 | 交流

「きになるゑひょうげん」展に連動し、応募作品の中から民間の店舗(公共施設含む)が気になる作品を選んで店内に飾るプロジェクト。福島市、いわき市、白河市など、毎年エリアを変えながら実施され、日常の暮らしの中での障がいのある方の表現との出会い、店主や来店者、作家との新たな交流機会を創出している。

取材日 2023年12月4日

回答者 岡部兼芳
(社会福祉法人安積愛育園理事・マネージャー / はじまりの美術館館長)
小林竜也(はじまりの美術館 企画運営担当)
大政愛(はじまりの美術館 学芸員)

福島県障がい者芸術作品展 「きになるゑひょうげん」

はじまりの美術館について教えてください

運営する社会福祉法人安積愛育園は設立して57年たちます。当初は主に知的・発達に障がいのある子どもの支援を行っていました。その後、大人の利用者も受け入れるようになり、日中の活動を充実させていくために、1997年から施設で創作活動を始めました。さらに関連の事業所が増えるに伴って、支援メニューの一つとして“unico (ウーニコ)”¹を展開しています。

そんな活動をしていた頃、2010年のフランスでの「アール・ブリュット ジャポネ展」²の開催をきっかけに、公益財団法人日本財団で、障がいのある方の表現に特化した美術館を創設しようという構想が立ち上がりました。その構想に参画する団体の募集があった際に、私たちも手を挙げることにしました。それまで地元の貸しスペースなどを借りて小さい展覧会などを開いたり、また公募展に作品を出す利用者や、「アール・ブリュット ジャポネ展」への出品などが海外で紹介される利用者も出ていて、常設展示や制作のための施設をつくりたいと考えたからです。

少しずつ美術館設立に向けて進んでいたのですが、2011年に発生した東日本大震災の被災で整備計画が一時棚上げになりました。しかし、日本財団などの支援によって再び計画が動きだし、2014年、築約140年の酒蔵を

1 社会福祉法人安積愛育園が利用者の創作活動を支援するプロジェクトの総称。創作された作品を広く知ってもらうための展覧会開催や、作品の商品化・販売を通して、利用者と社会をつなぐ活動を行っている。

2 2010年に、パリ市立アル・サン・ピエール美術館が、滋賀県のボーダレス・アートミュージアム NO-MAの協力によって開催した展覧会。63人の作家の作品が一堂に会して12万人を超える観客を魅了し、2011年から国内巡回展が行われた。



『きになる≧ひょうげん』展

改修して当館を開設することができました。なお、制作のためのアトリエ機能までは備えられず、創作活動は各事業所が担うかたちです。

現在、年間5本のペースで展覧会を開催しています。春夏の企画展は、テーマを設けて障がいのある作家も現代アートの作家も、さまざまな作家をご紹介します。さらに秋には、県からの委託事業「福島県障がい者芸術作品展『きになる≧ひょうげん』」を開催しています。

『きになる≧ひょうげん』展の開催経緯は？

同展のスタートは2017年の冬です。発端は県から、県内の障がいのある方の作品展を開催したいというお話をいただいたことでした。

それを受けて企画を練りましたが、2017年当時既に障がいのある方の公募展は全国でも多く開催されており、このタイミングで始めるのなら、どんな特色を持たせるかが一番の課題となりました。他の公募展などにも足を運び、それぞれの独自の視点を参考にしながら、福島ならではの公募展のあり方

を探りました。その結果、「評価や審査の基準をもっと感覚的なものにしよう」ということで「きになる」を評価軸にしました。専門家の評価ではなく、つくる側や見る側がどう感じるか、いかに心を揺さぶられるかというところを大事にしようと考えたわけです。

また、アート作品ということにあまりこだわらず、自分はこの表現が気になるから応募するというふうに、出品に対する敷居を低くしたいと考えました。その気持ちを込めたのが、公募展タイトルにある「ひょうげん」です。多様な作品を括れる言葉で、応募に、より広がりをもたせられます。募集告知ポスターでも、「障がい者作品展」は小さくして「きになる≧ひょうげん」展ということを前面に出しています。

『きになる≧ひょうげん』展の実施で大切にしていることは何でしょうか？

関係性です。「きになる」と「ひょうげん」の間の「≧」は、つくる人、支える人、見つける人など、さまざまな関係性を表しています。障がいがあるから面白い作品が生まれるのではなく、作者の素材との出会いや、日常の暮らし、支援の現場でさまざまな人と接する、その関係性の中で、気になったことやこだわりから面白い表現が生まれてきます。その表現は見る人にも何か「気になるもの」を感じさせます。そこから、作者のことや作品の生まれた経緯を想像したり、展覧会に来場した人が気になった表現から自分も何か表現したくなったり、さまざまな動きにつながっていく。そうして、「きになる」と「ひょうげん」の間に循環が生まれるのです。障がいとは、何か明確な境界があるわけではなくて、どんな人にもそれぞれに生きづらさがありますから、この展覧会がいろいろな生き方やいろいろな表現があるということを体感できる場所になって、いろいろな関係が育まれていくことを目指して取り組んでいます。

通常、公募展は作品本位で受賞作を決めますが、本展は審査基準も「き

になる」です。作者本人あるいは周囲の人が応募するときに「きになるポイント」を書いてもらい、それも含めた審査で、4名の審査員³は自身の気になったものに票を入れ、個々それぞれの審査員賞を決めます。応募者にも「あくまでも審査員が今回気になった作品として選んでいる」と伝えています。なお、一票でも審査員票が入ったら入選、3人以上が票を入れたら特選、そして特選の中から「県知事賞」や「きになるびょうげん」賞が選ばれます。

加えて、「オーディエンス賞」です。来場時にアンケート用紙とともに葉っぱ型付箋の投票用紙をお渡しし、展覧会を見て回った後、好きな作品を1つ選びコメントをつけて、会場内の「きになる木」に貼っていただきます。投票用紙をあえて貼り出して誰でも読めるようにしているのは、「こんな感想を持つ人がいるんだ」「自分とは違う気になるポイントだな」など、交流や繋がりへのきっかけづくりになればと考へてのことです。会期終了時、投票を集計して、オーディエンス賞を決めています。また、付箋は投票された作者にプレゼントしています。

さらに今年から作者宛に手紙を書くコーナーを設けました。オーディエンス賞の投票用紙に書ききれなかった思いを手紙に託して、作者に届けるという試みです。また、オーディエンス賞の投票は1作品ですが、「きになる作品を1つに絞るのはかなり難しい」という意見も多かったため、手紙は何人の作者宛に書いてもOKとしました。そうした手紙を通じて作者と繋がったり、連絡を取り合って実際に会ったりするケースなども見られるようになっています。

また、お客様が展覧会の会場に入って来られた段階で、スタッフからアンケートを手渡しするのですが、アンケートを渡しながら少し話しかけて、それをきっかけに、「実は私、この公募展に応募したんです」というような感じで、応募者の方からも話してくださるなど、自然に来館者とスタッフが話す空気感

のようなものをつくっています。そういったことをきっかけに新たな交流が広がると感じています。

このほか、関係づくりや交流の促進ということでは、2023年度に関連イベントとして「きになる表現者たちの座談会」を開催しました。これは「応募者同士で交流する場がない」「悩みなどを話し合う場がほしい」という声に応えたイベントです。とくに事業所などに通わずに自分で表現活動をしている人などから、そうした意見が多いため、この公募展をきっかけに交流していただければと思っています。

展覧会実施まで、どのような手順で進めているのでしょうか。また、展示で工夫しているのはどのような点でしょうか。



作品募集チラシ（応募募用紙）を約5,000枚印刷して、9月頃から配布します。配布先は、応募実績のある施設や県の福祉関係リストにある事業所、社会福祉協議会、各市町村、公共施設などです。また、ホームページからのダウンロードや、当美術館でも入手できるようにしています。

応募期間は、9月中旬から約1カ月半です。応募は、作者本人はもちろん、ご家族や学校の先生、福祉施設の方などが間に立つこともあり、個人での応募と支援者・学校経由の応募は2対3ぐらいの割合です。

この期間に当館に作品がどんどん届きます。今回の応募総数は約470点でしたが、昨年までは1人3点までの応募が可能で、500点を超える作品が集まっていました。ただ、年々、展示スペースが足りなくなっていた上に、応募点数が複数の場合に、応募者からは「一点は飾ってもらえたけれど、もう一つの作品が展示されていない」と残念がる声もありました。そこで今年から応募作品は一人2点まで、その代わりに全作品を展示することにしました。

やはり、準備作業が一番大変なのは作品の受け入れです。絵画や立体は

3 審査員／日比野克彦 美術家、東京藝術大学学長）、川延安直（福島県立博物館専門員、一般社団法人会津地域文化芸術フォーラム社員）、川内有緒（ノンフィクション作家）、岡部兼芳（社会福祉法人安積愛育園理事・マネージャー、はじまりの美術館館長）

もちろん、写真もあれば、小説、書、エッセイ、日記、手工芸や工作した作品などもあり、多種多様な形状のものが届きます。なかには音楽作品もあり、展示では、一緒に送付された楽譜とともに音源を設置して音を流したこともあります。あるいは、短編映画などの映像作品など、本当にさまざまなジャンルの作品が届くため、その管理には気を使います。

また「展示可能な状態で応募してください」とお願いしているのですが、額装されていないものなど、応募されてきたそのままの状態での展示してよいか悩むことも多々あります。中には、素材的に壊れやすいものもありますし、持ち込まれたときに既に壊れていて、修理をお願いしたりすることもあります。応募する際の、作品を傷めない梱包や、作品が引き立つように展示するためのポイントを伝える動画のYouTubeでの発信やワークショップなどができればと考えているところです。

そして応募期間が終了すると、集まった作品をモチーフごとに分けます。例えば「食べ物」「人物」といった分類で、抽象的な作品の場合は作者がつけたタイトルに頼ります。その結果、全応募作品が大枠で分けられ、全てを平置きした段階で審査していただき、各賞を決めています。その後、審査結果を受けてバランスよく配置を考え、展示していきます。

公募展の成果として、どのようなことが挙げられますか。

この公募展に向かって制作しているという声を聞くことが多くなっています。それも、トップの賞を目指すというよりも、公募展に出すことが大事で、展示された自分の作品を見て喜ばれる作者は多いようです。もちろん、受賞したとか、入選・特選となったかを気にして、悔しがら姿も見られます。

また、当初、企画を練っていた頃は、県内での障がいのある方による創作活動はそれほど盛んではないと捉えていました。しかし、回を重ねるうち、思いのほか創作活動に取り組んでいる学校や事業所が多いことがわかり、

最近ではより活発になっていると実感しています。

きになるまちなか美術館

どのような事業ですか。

「きになるまちなか美術館」展が終わってから、だいたい2月中旬から3月中旬ぐらいまでの約1カ月間、その年の「きになるまちなか美術館」展への出品作品をまちなかの店舗に展示していただくという企画事業です。というのも、当館のある地域は冬にかけて雪が多く、冬開催の「きになるまちなか美術館」展に来づらいという方がいらっしゃいます。一方、私たちは公募展を実施する前から猪苗代町内の商店街に“unico”の作品を展示していただいたりしていました。その経験も踏まえて、「きになるまちなか美術館」展の作品の一部巡回のようなかたちで始めました。

本当は、巡回展として県内を回れば一番良いのですが、展示する作品は作者からお預かりしているものなので、私たちが責任を持って搬入・展示を行いません。これも小所帯の当美術館ではなかなか難しいことです。2017年度と2019年度は県内3ヶ所で広い会場を借りて巡回展を行ったのですが、現在は一つの地域に絞って現在の形で実施しています。2022年度は白河市、2021年度はいわき市、2020年度は福島市。福島は広いので、浜通り、中通り、会津と少しずつ開催エリアを変えています。展示していただくお店は10店ぐらいで、飾れる作品点数はお店によって違いますが、総数として20～30点です。

なお、これは厚生労働省の支援センター事業として、当館が自主的に実施



『きになる、まちなか美術館』

するものです。当美術館は、2019年度から福島県障がい者芸術文化活動支援センター事業として、「相談事業」「人材育成事業」「情報収集・発信事業」などにもあたっています。

どのようにお店側と交渉されているのですか。

広く募集もしますが、まずは私たちが作品を飾ってくれそうなお店を探します。その際には、地域で知られていてお客様が多いお店、雰囲気が高く、アートとの相性が良さそうなお店、自分たちが利用した経験のあるお店などを基本に考えます。また、店舗ではありませんが、図書館や市民交流センターのような公共施設なども候補にします。

まずはそうしたお店に直接、打診します。本当はお店の方に展示会場に来て作品を選んでいただくのが理想的なのですが、了解が得られれば、展示会の様子や作品を映像化して、お店の方に見ていただき、気になる作品を選んでもらっています。

つまり、この事業の特徴は、お店の方が気になった作品を飾ってもらうことにあります。展示にも、お店の方の言葉を一緒に添えます。それを見て、作品やそれを選んだ理由などについてお店の人と来店者との間に会話が生まれることで、障がいのある方の表現への関心や、ひいては障がいへの理解に



『きになる、まちなか美術館』

もつながると考えます。

展示は、紫外線が当たらない場所を選ぶなど、作品にダメージを与えないように配慮して行います。そして会期が終わると作品を回収して、それぞれの作者に返却します。

どのような反響がありましたか？

毎回好評で、お店の方たちにも「展示して、すごくよかった」と言っています。作品を飾ってもらった作者がそのお店に行くこともあり、そうした交流をきっかけに、店内に手すりを取りつけられたお店もありました。また、自店の展示作品を購入されたケースはまだありませんが、その作者の別の作品を購入されたお店の事例はあります。

「またやりたい」と言ってくださるお店も多いのですが、エリアは年ごとに変わりますし、作品の搬入・搬出や展示をすべて私たちが行うため、複数力所での同時開催が難しいのが現状です。けれども、理想は毎年同じ場所で継続していくことですので、設営・展示のワークショップなどを開催して協力者を増やし、私たちが行かなくてもうまく展示ができ、同時開催できるような仕組みをつくれなかと考えています。